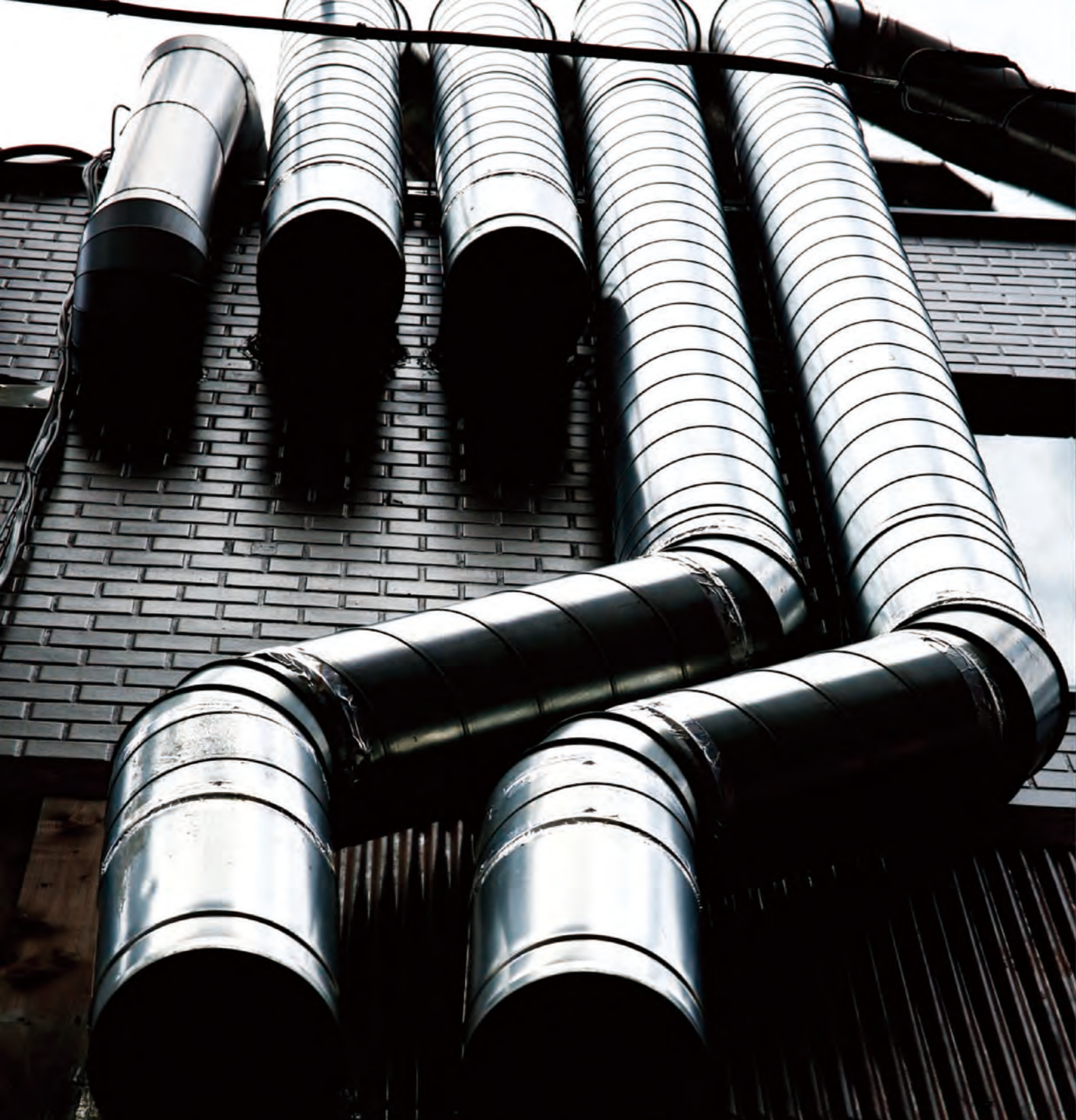




【意のあるところに通う技】

建物が隣り合ってたてこんでいる町場のビルが狙い目だ。ダクトを探すのであれば、そこを見逃してはいけない。建物だって人だって息継ぎしなくてはならない。息が詰まるからだ。直線で、最短コースを理想にして、壁をダクトがはいあがる。それが許されない状況がしばしばあるせいで、日本のダクトは特異な形状となっている。それを可能にしているのが板金工の腕であり、職人技がダクトにシュールなふるまいをさせている。

文と構成／河村喜代子 写真／油科康司、今井今朝春



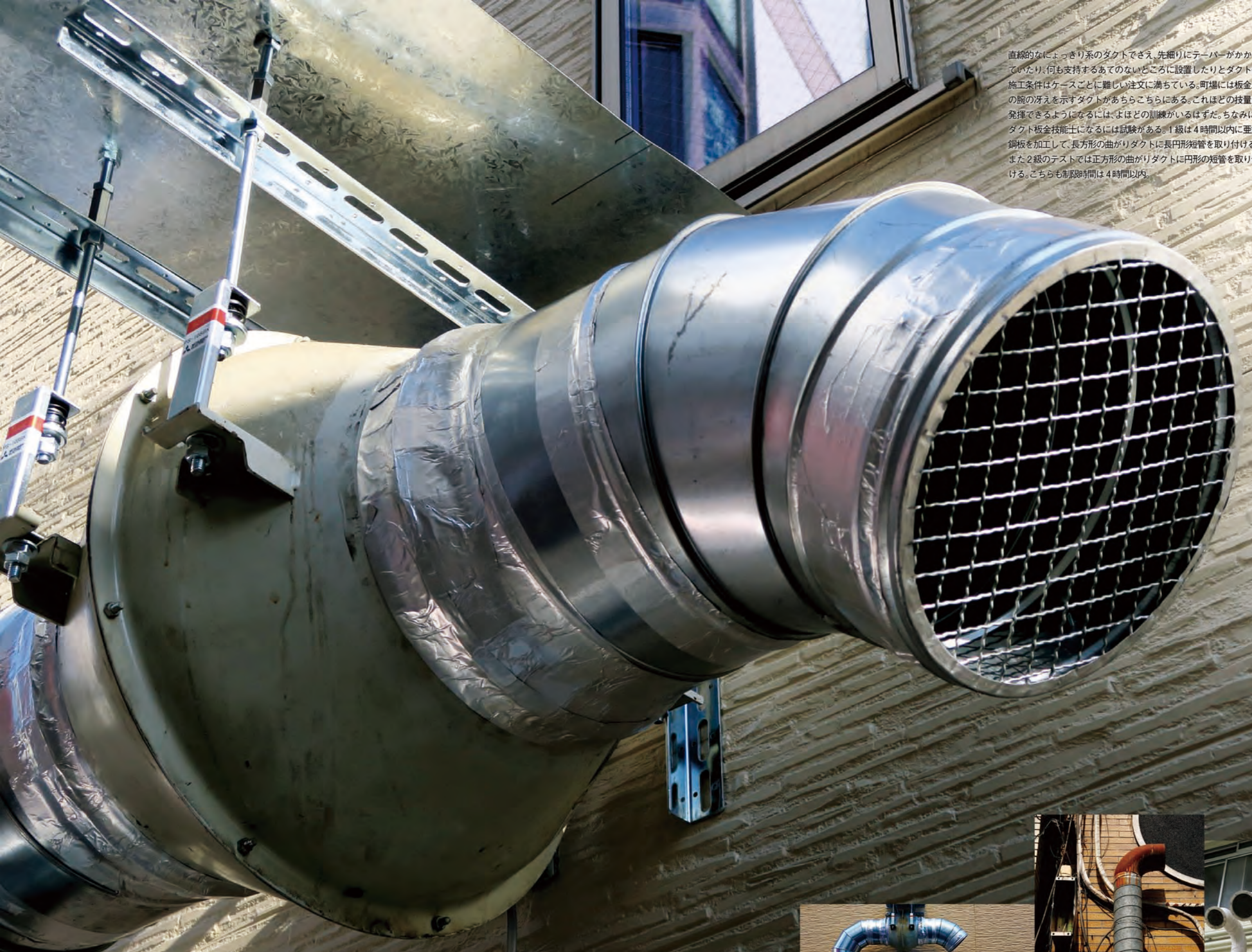
ヨシしたり、不申議な形状をとつたりする原因になっている。
ダクトの仕事は、空気交換した気体を排出することにある。その目的を達成するためには、ダクトは真っ直ぐのものから角度をつけて曲がったものなどが用意されている。それを現場の条件に応じて組み合わせる。ダクトが方向転換する必要が生じた場合は、エルボという曲がったダクトを組み込む。曲がる角度は通常90度である。時に45度の角度で曲がるダクトもある。ダクトの形状見本帳をのぞいてみると、二股に分岐するダクト、三股に分岐するものなど、いろいろなかたちがある。それを見るだけで時を忘れそうになる。直線のダクトを含めて、はじめから終わりまでが一本のダクトというケースは希だ。たいていは、ダクトとダクトをつなぐ職人が板金工だ。このつなぐ技術こそが、板金工の腕の見せどころになる。板金加工の専門用語では、「はぜ」と呼ぶ。代表的なつなぎ方の「はぜ」には二つある。一つはボタンパンチはぜである。もう一つがピツパグはぜである。後者は日本では「三井はぜ」と呼ぶのが通例になっている。その由来は、三井財閥が建てた西洋風の建物で、最初にピツパグはぜが行なわれたことによるのだと噂だ。空気が漏れないように、折り返して接合する方法である。



まるで、意思のある生き物のようである。町を歩いていると目にとまるものがある。探したわけでもないのに、何とほなしに目に入ってくる。意識にのぼる以前に見てはいたのだけれど、どうしてそれが気になるのか。整理して考えたことはなかった。対象はダクトである。
いったんダクトの面白さに気がついてしまうと、探さずにはいられない。狙い目は、建物が隣り合っている町場のビルだ。身体を入れる幅もないほどの狭い場所にたつて、ダクトはある。ダクトが注意をひくのは、自然界には存在しないカーブと直線の組み合わせでできているからだ。人工物にしかあり得ない造形だ。しかも不自然な角度に折れ曲がっている。あるいはこのまま直進するのかわたし予測を裏切って、ゆるやかなカーブを描いて伸びる。垂直に壁をのぼって天を突くかと思えば、唐突に終わってしまうものもある。要は、建物から最短距離で、排気可能な場所に出ればいい。家がたて混んでいる場所なら、屋上に出るのが一般的である。近隣から文句のようがない場所を、排気したいからだ。隣との境に塀があるなら、その内側ギリギリの場所で排気できる場所を確保することになる。もちろん空気が抜けていく方向には配慮が必要になる。ゆめゆめ隣に直接排気する方向になってはならない。こころへんの案配により、ダクトはアンジュレシ

The Art of Duct

直線的なよっきり系のダクトでさえ、先細りにテーバーがかかっていたり、何も支持するあてのないところに設置したりとダクトの施工条件はケースごとに難しい注文に満ちている。町場には板金工の腕の冴えを示すダクトがあちこちにある。これほどの技量を発揮できるようになるには、よほどの訓練がいるはずだ。ちなみに、ダクト板金技能士になるには試験がある。1級は4時間以内に垂鉛銅板を加工して、長方形の曲がりダクトに長円形短管を取り付ける。また2級のテストでは正方形の曲がりダクトに円形の短管を取り付ける。こちらも制限時間は4時間以内。



The 時が止まって。Art of